

# 幸せの国・ブータンの メリー・ポピーたち

松永秀和

## 5 花を求めてブータン紀行



ワンデ=ボドラン県、ワルタン峠の南 標高約4650m

ブータンの人々は自分の国を「ブータン」ではなく、「ドゥク・ユル」(Druck yul)と呼んでいる。ドゥクはチベット方言で雷龍、ユルは国と大いにかかわっている。16世紀初頭、チベット仏教の一分派、ドゥク派が権力争いに敗れ、ヒマラヤを越えてこの地に逃れ、政教一致の国を作った。それが国のはじまりとされる。このドゥク派の名は、開祖が本拠地に僧院を建設したとき、大きな龍が9匹現れ、雷が3度鳴ったことに由来する。ドゥク派はブータン国教となり、雷龍は国旗に白色で描かれている。

この国名を冠した青いケシがある。その名も「メコノプシス・ドゥクユエンシス」。以前は青いケシの代表種「メコノプシス・ホリデュラ」と見られていたが、葉の形や色、棘<sup>とげ</sup>の付き方が基準種と異なることから、C・グレイ・ウイルソンによつてホリデュラの亜種とされた。ホリデュラは亜種も含め、中国青海省からチベット高原、ブータン、ネパールにかけて広く分布している。このことから、ヒマラヤが隆起を始める以前から、この地域に広く分布し、ヒマラヤの隆起で分断され、固有化していくのではないかと私は想像している。

このM・ドゥクユエンシスは、スノーマントレックのジュレ・ラからワルタンにかけて咲いているが、往路ではやつと葉が出たばかりだったが、1週間後の帰路では大柄の花をつけていた。撮影しているときにわかに霰<sup>あられ</sup>が降り始め、遠くで雷が鳴つた。